

## 日本語学会 第 145 回大会報告

2012/12/12 @語研 風間伸次郎

### 1. 「アイヌ語十勝方言における証拠性と叙述類型」高橋靖以

アイヌ語では以下の名詞化辞によって、証拠性の表現を形成する。

sir 「(周囲の様子) (名詞) > sir 「視覚による認識」 (名詞化辞) ⇨ ~しそうだ

hum 「音、身体感覚」 > hum 「視覚以外の感覚による認識」 ⇨ ようだ

haw 「声」 > haw 「発声による認識」 ⇨ (するそうだ)

ru 「道、跡」 > ru 「証拠に基づく確定的な認識」 — 情報のタイプに関し無標

このうち、sir による表現は、未完結の事象や場面レベルの叙述 (事象叙述) に限られる。

ayapo etap wakka poronno ohetke sir an cikari.

おやおやこそ水 たくさんこぼれ落ちる NOM ある 惜しい

「おやおや、水がたくさんこぼれ落ちている。勿体ない」

視覚による情報と考えられるケースでも、固体レベルの叙述では ru が用いられる。

toon nupuri onne ru an.

あの山 大きい NOM ある

「あの山は大きい」

その他の形式による表現では制限が無く、固体レベルの叙述 (属性叙述) でも用いられる。以下は hum と haw による個体レベルの叙述の例。

taan imi ponno ironne wa pase hum an.

この着物 少し 厚い て 重い NOM ある

「この着物は少し厚くて重い」

taan cikap haw-e pirka aw an

この鳥 声-POSS 良い NOM ある

「この鳥は声が良い」

## 2. 「サハ語(ヤクート語)の勧誘形における「双数」の解釈」江畑冬生

サハ語の勧誘形で、-uax (母音調和する) のみの形は先行研究で「双数形」、さらに-(I)ŋ のついた-uax-uŋ の形は「複数形」とされてきた。

ubaaj saa-nuu aʒal iti ah-uu kuottar-uum-uax  
 兄-voc 銃-ACC 寄越:IMP.2SG その 食べ物-ACC 逃がす-NEG-IMP:1PL

「[狩りで]兄さん、銃をくれ。その獲物を逃さないようにしよう」

biligin kiniler-i ist-ies-ij  
 今 3PL-ACC 聞く-IMP: 1PL-IN

「それでは彼らの話を聞こう」(聞く人々は複数)

しかし勧誘以外に双数は見られない、他の形式との共起では-(I)ŋ は双数を示さない、などの問題がある。

tuox suuuha-nuu bul-lax-xuutu-na miexe biller-eer-ij  
 何 誤り-ACC 見つける-TEMP-2PL-PART 1SG.DAT 知らせる-IMP:FUT-2PL

「[君たちが]何か間違いを見つけたら、私に知らせなさい」

挨拶では、聞き手の数に応じて次の形式が使い分けられる。

	単数(対個人)	複数(対多数)
こんにちは	doroobo	doroobo-lor-uŋ
ありがとう	bahuuuba	bahuuuba-lar-uŋ

ここで、主語の数でなく、「聞き手の数」という観点から整理し直せば、一貫した体系が得られる。

	主語の数	聞き手の数
勧誘 -ø / -(I)ŋ	双数/複数	単数/複数
命令 -ø / -(I)ŋ	単数/複数	単数/複数

さらに氏はこのサハ語における現象について、①チュルク諸語における歴史的形成過程、②モンゴル語との対照、についても分析結果を提示した。

### 3. 「上甌島瀬上方言における清濁の対立」 黒木邦彦

この方言では、複合語形成時に複合語後項の語頭子音が次のように交替=連濁する（なお表記は氏のものより若干簡略化した）。

- a. [ɸ, h] > [b]: [ɸune]船 > [kobune]小船 [hasa:mʲi] > [kambasa:mʲi]紙鉄  
b. [ç] > [b]: [çi]火 > [hana:bi]花火  
c. [t] > [n]: [to:]戸 > [amino]網戸, [amano:]雨戸  
\* [ta:zi]立ち > [ju:na:zi]夕立, [sagana:zi]逆立ち  
d. [ts, tɕ, c, s] > [ɲ, z/z̥]: [tsugi]月 > [mikkaju:gi] 三日月 [tɕi]皿 > [hana:ɲi]鼻皿  
[tɕawan]茶碗 > [tɕanawan]湯呑み [saja]皿 > [koɲaja]小皿  
[saro:]砂糖 > [kujoɲaro:]  
e. [k] > [ŋ]: [kuruma]車 > [ɲiɲuruma]荷車  
[ke]毛 > [ɕiɲe]白髭, [me:ɲe]眉毛

濁音は、一般的な本土方言では有声阻害音であるが、瀬上方言では鼻音に偏っている。

第2音節以降の[ne, no, na]は[de, do, da]とは対立しておらず、語頭の[de, do, da]などと相補分布している、などの理由から、氏は第2音節以降の[ne, no, na]を/de, do, da/と解釈する。

一般に、濁音音素の音節的制約は清音音素のそれよりも強い。

しかし、次のように、瀬上方言の濁音音素はそれほど制約されていない。

- ・濁音音素で始まる単純語を固有している
- ・濁音音素を複数值含む単純語を固有している
- ・長濁音を許容する(=濁音音素は促音音素の直後に生起できる)

結論として次のことを主張する。

- a. 瀬上方言における濁音音素の音韻的制約は、一般的な本土方言におけるそれよりも弱い。  
b. 瀬上方言の清音音素と濁音音素とは、音韻的制約の面では対立していない。

#### 4. 「述語の格体制からみた構造と意味の対応とズレ」 定延利之

・文内に現れる名詞句の格形が述語の格体制から予想しきれない場合に、それが何によってどのように動機づけられているかを観察する。

1. 文中の名詞句の格形は、述語の格体制から理解できる部分が多いが、述語にもヲ格名詞句にも動機づけられている。

(1)例えば、同じ地域に出張を繰り返しているビジネスマンが、今後とも引き続き利用してくれるとは限りません。

??例えば、同じ地域に出張を取りやめているビジネスマンが、今後とも引き続き利用・・・

??例えば、同じ地域に欠勤を繰り返しているビジネスマンが、今後とも引き続き利用・・・

(2)本学部・研究科に留学を希望する方は、以下の内容を日本語または英語で明確に書いて、下記のアドレスに送ってください。

??本学部・研究科に留学を取りやめる方は、以下の内容を日本語または英語で明確に書いて・・・

??本学部・研究科に退学を希望する方は、以下の内容を日本語または英語で明確に書いて・・・

これらは「動詞性名詞句+述語」全体で実質的な述語になっている（述語の連辞的(syntagmatic)な拡張）。そしてこれらは無条件では成立せず、前項の動詞性名詞句も、後項の述語も共に制限されている。後項の述語に対する制限から述べると、述語は、(i)前項のデキゴト(出張・留学)の実現を意味するもの、(ii)実現に向けた動きを意味するもの、(iii)実現の予想を意味するもの、に限られる。

2. たとえば(3a)下線部の格助詞「に」は、述語「隠れる」に動機づけられているように見えるが、実際は関連表現「見つからないようにする」からの類推によって動機づけられている（述語の範列的(paradigmatic)な拡張）。

(3)a. 親に隠れてタバコを吸う。

b. ??親に隠れる。

c. 親に見つからないようにしてタバコを吸う。

3. 全体部分関係や容器-中身関係などが名詞句の格形を動機付けることもある。次のような容器-中身関係では、ほぼ同様な意味を保存しつつ、2通りの格枠組みが可能である。

(4)a. 彼に魅力が欠ける。／b. 彼が魅力に欠ける。

(5)a. 資源がその国に乏しい。／b. その国が資源に乏しい。

(6) a. 街に活気があふれる。／b. 街が活気にあふれる。

4. 日本語では「全ての」「或る」のような量化専用の語句とは別に、形式の類似した2つの語句が全称量化・存在量化と結びつくこと、1つの語句が全称量化・存在量化の意味を併せ持つことが珍しくない。

(7) a この海域じゅうに財宝が眠っている。(全称量化)

b この海域ちゅうに財宝が眠っている。(存在量化)

(8) a. 「飲んだ?」「グビグビ。まだ。ちょっと待って。グビグビ」(全称量化)

b. 「あっ、飲んだ！ 見たよ。一口でも飲んだことは飲んだよね。」(存在量化)

その中で、格助詞「に」、存在量化の時間表現と共起しても大きな意味変化を起こさない一方で((9)), 全称量化の時間表現との共起は、存在量化への意味変化((10))や、自然さの低下((11))をもたらす。

(10) a. 夏じゅう仕事をする。 b. 夏じゅうに仕事をする。

(11) a. 6月いっぱい雷が鳴る。 b. ??6月いっばいに雷が鳴る。

名詞句の格形が述語の格体制だけでなく様々な事情に影響され、自然な文と不自然な文の境界が入り組み、ぼやけている(程度問題である)ことを見た。

このように入り組みぼやけた「自然な文」の領域を規制群(べからず集)で捉え尽くそうとすると、規制が複雑になり過ぎて、話し手にとってリアルなものにならない。むしろ、話し手が「踏み慣らされた径」(Durie 1999)に身をまかせ自然に歩を進めた結果として捉えるべき部分もあるだろう。

Durie, Mark. 1999 "The temporal mediation of structure and function." In Michael Darnell et al.(eds.), *Functionalism and Formalism in Linguistics, Vol. I: General Papers*, pp. 417-443, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.